

アムスルだより

No.15 1995年 9月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



台風と慶良間

離島に住んでいて、今の時期一番気になるのは台風の動きでしょう。1961年から1990年までの30年間の平均で、台風の発生がもっとも多い月は8月の5.5個で、次に多いのが9月の5.2個です。また、大きな被害をもたらすような強い台風は9月に多い傾向があります。台風が近づくと、船を陸に上げたり、風で物が飛ばされないように台風対策をしなければならず大変ですね。今年は台風が少ないですが、どうしてなのでしょう。そこで、今回は台風についてお話しします。

熱帯低気圧の中心付近の最大風速が秒速17mを越えると、台風と呼ばれるようになります。そのすさまじいエネルギーは、どこから得ているのでしょうか。台風のエネルギー源は水蒸気が水や氷になるときに放出する熱(潜熱)であると考えられています。台風がどうしてできるのかは、まだ解明されてませんが、次のような説があります。日本の南方海上で、温かく湿った空気が集まるところに上昇気流が生じます。このとき、湿った空気は積雲や積乱雲

をつくと同時に、潜熱を放出します。この潜熱のために上昇気流はさらに促されることとなります。このように気流の上昇しているところには、周りから空気が吹き込んできますが、この空気が温かく湿った空気であると、再び雲をつくり潜熱を放出して、上昇気流を強くし、吹き込みを強くするのです。この吹き込みが、地球の自転の働きによって渦となったものが台風(熱帯低気圧)というわけです。

北半球の台風は反時計回りに渦を巻きます。このため、台風の進行方向の右側は、台風の進む速度が加わって、より風が強くなります。1991年の台風19号や1993年の戦後最大と言われた台風13号を覚えている方も多いのではないのでしょうか。これらの台風は久米島付近を通過したため、その進行方向の右側にあたる慶良間は猛烈な暴風雨にみまわれました。この時阿嘉島では、台風の通過とともに風向が東から南へと変わっていったので、ニシハマから集落にかけては特に被害が大きかったのでしょうか。

台風の発生が多い年は、太平洋高気圧が比較的北側にかたより、その勢力が強く、中・高緯度地方の上空で吹く強い偏西風(ジェット気流)の勢力も

強い傾向にあります。逆に台風が少ない年は、太平洋高気圧が南側にかたより、その勢力が弱い傾向にあります。しかし、まだはっきりとわかっていないことが多く、現在多くの気象学者らが、人工衛星を使った観測やコンピューターでのシミュレーションなどによって研究しているところです。

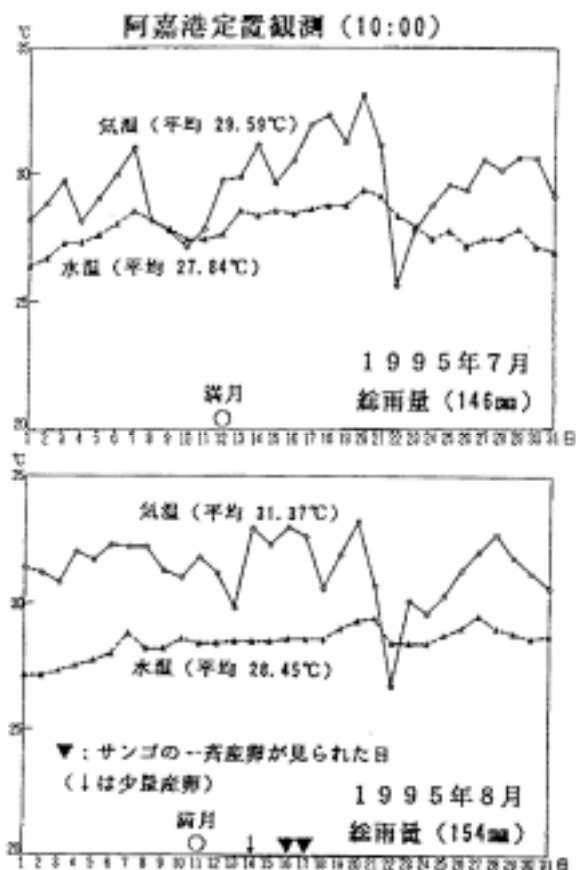
台風という言葉は、ギリシャ神話に登場する風神の子・テュフォンに由来していると言われています。テュフォンは神の子であるにもかかわらず、その風の力を使って暴れ回ったため、怪物として扱われています。その圧倒的な風の力を使って暴れ回る台風の語源としては、まさにぴったりという感じがしますね。

台風は大きな被害をもたらしますが、恵みの雨を与えてくれる大切な存在です。昔から島の人たちは台風と共に暮らしてきました。サンゴ礁は天然の防波堤で、海岸の防風林は強い風を弱め、赤瓦屋根の家は涼しくて、しかも風雨に対して強いように工夫されています。現在ではコンクリートの防波堤や壁や家が変わってきていますが、昔ながらの生活の知恵を大切に生かして、台風とつきあっていきたいものです。

阿嘉島の海より

-パソコン通信-

研究所では最近パソコン通信を始めました。台風の進路予想天気図なども、電話回線を使って気象庁からいつでも入手することができます。こうした情報が必要な方は、遠慮なく研究所までお越し下さい。



-ウミガメ放流-

7月18日に慶留間小中学校にて開催したマリンスクールでは、研究所で育てたウミガメ(タイマイ)5頭の右前足に標識を付けて、外地島から皆で放流しました。翌日、そのうちの1頭が阿嘉港にいたとの知らせがありました。早く自然の海になじんでくれればいいのですが...

また7月27日に阿嘉離島振興総合センターにて、日本ウミガメ協議会会長・亀崎氏ほか2名によるウミガメについての講演会を開催したところ、約30名の参加があり、活発な意見交換が行われました。今後もこのような活動を通して、地元の皆さんと共にサンゴ礁の環境保全について考えていきたいと思えます。